玉孫諸孫系譜

2
365
4

利2
365
4

東京帝國學士會

五巻 初丁 右

○れてゐその結びとある辞ハ。云云おホくハ仰おホある辞云云

△炊おホくハと云へる詞に眼をつけて考ふべし、何ある事にはあらざ、然るに炊

さる辞のおそのその結びなるもいとそくなきにもあらざ、然るに炊

をバおそ[illegible]その結びハ、必皆下知の詞と云ひろふ人の世小多きハいとゝ

つきなし、ある書に、五十音を八十行をゞゝに、初躰用令助とてろるとてろえて、

えけせてねへめえも返を令なりゝと云へるにたゞ[illegible]韻の十音を

なゝ下知の詞ゝてろう

るくいらく粗きてろ、

細谷 可

○考へ試むべ

△竹ハ試るべ[illegible]と有べきなり引てろみる」と云詞の麻行中二段オ

てろむ。」と活るゝて、正き書どもの証、古くハまゞ見當らざ、や多ゝて

○玉のをゝり分

の世のりのゝハをゝしくゝゆれどゝそれよゝしゝハ云ゞゝかゝうん、山口栞ふ仮名づかひ活語指南ゝ
其活さま畧図の越き
委ゝしく論ぜるゝなり、そもかゝる詞の活きのりの損ひハ鈴屋集・記傳等に
もゝをりくあなり、いとんやてふをにふうゝきせの奇ようゝの書ゝ
ゝハ、寄ふも少ゝゝゝ、文ゝハいゝゝく駁きなり、

○又今の世ゝ俗俗のてふをたゝそも。おその結びだゝるゝけ。云云

△然処ハ、おのづゝゝ雅俗の格ゝ異なゝるもおかし」ゝ板に云て省べ
ゝ皆ゝハ云難きを然処の云ひさまの如くゝてハ、初学思マヌたがひゝ
者ゝらん、抑おその結びよ、俗語ならぬ分のやく古きにゝゝ、然ゝそのゝ
かゝりのいゝゝそも賞ゝる多かるゝゝを然ゝ是のれく十丁十丁に即いつる説
観ても熟ゝく意を用ゐて古への正きを学ふへきゝゝを思ふべし、

○いひゝきゝゝて云云

△云ひゝけゝて結べるおそふ凡そ二有、其一ハ云を二でゝうけて云ひゝ
くゝる、即爰にゝゝる分ゝゝもの如ゝ、地名のいきゝゝ命の生きゝゝ、或ハ山と
止ゝ、或ハ又ゝゝゝ御律となゝるゝ、さて二ゝ目ゝ彼の詞二をゝぬる
ゝハゝゝゝで、只おその結びを要ゝ迄ゝて云ひてゝて有、要之来に
ちゝけてりゝゝもゝ[おそ]ゝくるゝ者の波ゝゝ先ゝゝ人のたつらん」ゝみえ
ゝるなゝどなゝり、

○おそ二つある分云云・いゝゝ先づゝし

△仲文集ふ、買ゝよゝりも賣ゝる[こそ]罪ハ重け[なま]うん[こそ]釜のそこ
ゝ有[ハ]、底ゝ其許とをうけなるわゝ、[ハ]も[こそ]二あれど結びおのゝくゝるれバ二の

「こそ」を累みて一つに結べる例ニハ同じからず、さて序に云ざん、文章に
こその二つ有て其結びハ一ニたゝみて結べるかと見えつる有、枕冊子
春七 四丁「実白殿の云ゝやありしハせ給ふに宮の大夫殿の清涼殿のまへに
たゝせ給へれバみさせ給ふまじきなめりとみるかどのおしあてみ
出させ給へハふとみさせ給ひし「こそ」なかいふばかりの御行の
程なからんと見まほし「こそ」いみしかりしか」是ハ結びハ一つの志かる
るを、上なるこそ二つともいづれも此志かの結びへからずと云べく
もいはれぬさまなり、されど万六の長奇なるを爰に出して疑へる
し」とあると全く同じくもあらねバ、こハりしくハ「程なからん」の「ん」の
字、或ハ脱の字誤ならんかと思へる、又志かうまでハ上なるこそやぞ

の誤りならんと猶よも思へどもハゞと文ある上をまちとんとかゝる
猶のこと有ニや、かふうく外外にをさく覚えぬことひをするあと
なるを、その序に爰ニ云て畏き人の評めを期つ、源氏若紫 古三 十三「うへ
こそ此ちニ有し源氏の君こそおもしろきなどころもぬとのすふを
「云」と有ぬも考べし、より分と云ニ従ちゝねどついて云ニ云、爰ニ引ける「大系や」のうさえ 第二句の山を招、第四句の如鈔をと作るニ従ふぞよ紙、
○志をとて挟ミ 是ハ云云されバ挟ミの下へかゝりてといふ云を加へて
又とはゞ云ゞらぬ語って。
△此志をとて挟ミ文章ニも有、源氏帚木 湖四 十二「などうくうとぬしきめの小
しもおかまてべきおかてなきさぬなる志をとて挟ミ契りあるとハ思ひ捨え
識やもこその下ニ云脱しまる事有、△行末を押料て危むもこそ文章ニも用ふ例あなり、
「め」栄花石蔭「くてみるど云ゝ悩ましうさ云ゝ是より重らせ給ふやうもこそあれと云「な」など、

○玉のをぐし分

○二ハさぞ〳〵おしてくるゝ

△爰ニ挙〳〵る五首の中、金四の、おとゝりやかゝ[illegible]の小[illegible]ニ[illegible]
きゞ次さこそ。たかうけ人を法〳〵[illegible]是ハ次なる千六いゆのまゝ小
うきひろうけこゝろん さこそ 嵐ふおとゝのかゝ〳〵[illegible]新ハ[illegible]きけ
と付面新をのゝ才ニそく〳〵 さこそ。人を[illegible]〳〵かゝ〳〵[illegible]なと云
へるとハ、ふ〳〵これハやくそのやうかたりてきこゆる様なり、その故ハ、
さこそと云ひくる末を、らめなと云へるハけニ推〳〵ハうりくるときこ
ゆれゞ、凡て将の字に賞る詞ニそ[illegible]これハ已然云々る也云といへるハそれとは
異た〳〵くおもへる、然もゞも又よく思ふにもそゞにもくる詞なが
ら、ふこそその結びとなるハ推しハうりくるそろとなれるゞ多ろ

るとハ、上三丁右ニ小あもゝゝ其例のゝ又くる如くなれバ、さこそ[illegible]云へる
末を已然言ゝて結べるゝ、その例ハ少なゝれど、狂推し見るゝ多ゝと
なるも有ゝるへ〳〵、狂其例をゝ[illegible]ゝらバ補ひ註〳〵てん、
○おそとかゝゝて[illegible]ゝと結ぶ格ゝ。云云。さ格ゝ挙ふ条ようえ
めゝ。云云。
△挙ふ条ようと」と有を、万葉集の頃ニ始まれるとく言葉語ゝ
ゝ勿也、万葉ニ入もるいとふるき歌ニゝえたると云ふとぞ、この
辞、いとふるくよりゝ奇のゝたなゝゝゝ、文ニ入えくるも久きゝ[illegible]ゝ、
清麿等波奉侍留奴止所念天己曽姓毛賜豆治給之可」これらなゝ。二右ハ統紀
三十の五丁ゝ
る宣命ゝ。

○まつかゝ語の格

△此まつかハ、まく。まつ。まつ。が、と活く一つの用云なり、さて、それ
まく。ハ連用云、まつ。ハ連躰截断の二をうゝ、まつ。ハ已然言なるこ
と知語説略図に照して知べし、一巻四十五丁に○三轉の図といひて、まふゝ
ゝぬ辞といへるつゝへ[ヲ]と出せるハ空
ゝぬ由、彼処
に云ることし、

○後ハ
○みぢだくを紀語と云ふことを時々ふりて[丁そ]お
△此後撰の所、ゆゝ「ふりでぞおし」を字誤まれるこハ非るゝ、但
[朱]ハ此所のうへのこの考なり、[丁そ]と云ひて志と語ぶ
例ハ物とよりあきことにあゝれ、思ひまうふべうゝ、とさ紀ふ思ひ」を
さて後六帖をれバたゝしてたゝ紀、たゞし後撰のうさにつきてかゝ
処を志とのこと云へる例もいるこを然らゞゝ云こハいゝゞ、別ち拾九長奇の抱と
[丁そ]云「明証なり、さて六帖の如ゝ俗出てく[そこ]なりしを、後撰こハさと俗

て[丁そ]朱[し]といゝゝためて入られゝるならんもハゝり難
くれど、拾志うにたゝあゝゝ、後拾今の本の字語なるべし、
○をと語ぶ格

△是ハうれさ紀ふ思ひるるやう、此処云ひたゝゝゞ、抑千十一のうたゝ、
「君ふ[丁そ]云云志のくなれ」と云へきをたゝみて、さて、然る紀ふ云
意をバ云ひてゞゝたるゝて、語りなる志のくを。のをハ、上へ反り
て、「とそれめるゝを」と云処へ連くなるべゝ、続古十の八志ゝに[丁そ]人
のゝ志ゝをうつろもめ、然るを文ふこせるゝ山ぢゝゝ式」と云志なるを、
「うつろふを」と書こゝみゝ紀べゝ、五社百首の八多ゝ[丁そ]みやこ語す
もゝるべれ、然るを神ゝ此こもちのゝ不ゞ[図]と云志なるを言を
たゝみて「ゝるへきを」ゝいつるなゝり、されバうちまうせて「を」と語ぶ

云てハいゝぐし、と思しゝど、忘ハ右のごゝくゝそも現ホをゝと云ゐれど、
扶処の如くいさでもえあらじ上に、扶をハ皆抜の云のなりとぞ
知らるゝ、千載十一のを始め皆上へ反るゝ
のミ云まじき歟、猶よく考べし、

九右

○ホゝ結ぶ格

△是ハ、人ちまで［了そ］をゝんと思へ、結る［ホ］と云ひ、月をのゝ［了そ］
ながゝ夜しゝ、結る［ホ］と云へきを、をゝんと思ふ［ホ］と云ひ、ながゝ夜〜
［ホ］と云るなるべし、

右

○こゝまゝの［ホ］を力ゐりて云云

△下［サ］ホ、［右］のたゞひの［ホ］ハ、ちかゝをて、つゆの［ホ］りに成ゝちり」と云
へるゝと合考べし、かの人のきかく［ホ］などの［ホ］とこの［了そ］を結ぶ処す

右

おりる［ホ］ゝ、その忘その勢たゞひこゐひ似ゝり、

○ゝをゝ　ゝる格

△扶も上に准知さべし、さて扶をゝといひ［ホ］と云ひ［ゝをゝ］と云ひて、下へ
さゝゝ云ひつゞくること、文まゝハいと多し、こゝろハ右のごゝく
ちてゝるにより、ゆゆるなり、

△さてこのわゝりへ○［よ］ゝる格［ゝ］と云ふ条を一つ補入るへき歟、然
思ふに、栄花物語日蔭蔓ホ、村上の先帝ゝゝちゝかの大将のいも
うゝの宣耀殿の女御のうみおゝりし八宮［こそ］ゝ在の志きりのゝい
みゝきためゝ［よ］ゝ云る処、ゝこのゝゝめ辞ゝも云ふまじゝく、まゝ脱誤
などならんゝも思ゐれど、かゝる一の格ゝきゝなきゝゐれど、なほ

この格ありてハまぐさ見えねど有りげに思はる、

○ぞと又ぞとある格

△炊ぞをハ[illegible]ぞをとゝ、ぞハされぞとゝそみべし、伝説ある歌のたゝに「こそ」あれ、然もぞをわがたくきぞと今ハ恋ます、逢坂をいづアぢと「こそ」ゆゝ、されぞあくろづく結実まぞ有るゝ、ゝやうにいづれもなぞゝく考へべし、さて序に云ちん、炊格五七の字数さぐまれる所ゝのゝうゝ思へバ、ちゝ〳〵に、文章にもなほさる例ゆり、枕冊子春曙五の二十二丁かやうの事「こそ」かたゝゆるきりのうちふ入つへられどなれゝそゝ付をハいぐをせん」とゝえるなどなり

○[illegible]そのてふをはそのたさる所

△後撰十六の所ハ「ゆゝそ」ぬれてふて「こそ」ぬれにめをあれ、然るふそのゆゝのもふかるや人を思ふあるゝん」、新拾遺十七のハ、かりふ「こそ」ぬれおくのをあれ、然るふそのおとゝりこゝ多ゝそ人や拾まよふゝん」と云へるゝゝろなるを、をらも詞をたゝこゝみて云へるりのゝこゝバよからんと思ふハなゝゝなる心ゝゝる、かゝくに「こそのをざる」とハおもはれぬなりゝ

○六帖あむといひて云云

△「これハ[illegible]れ」を写ゝ語りそ[illegible]れる」とせるならんと思へど、なをゝゝゝに味ひられバ、さにてハ何となくあるさハうにさこゝ、おハ[illegible]ゝまされるものあるを」と云ふまて、彼をぞえのはゝこゝ

○玉のを乃分

みきどひけるよとうもろも」と云へるたぐひの変格にて、こゞさゝかくるゝハ物せしにてそ、狩いたぐふりて「を来」を一の格と云たぐそれゝ用ゐなるにあらぐやゝ、

○蜻蛉日記 第代をよバゝ山へのみのこ「丁枝」若ゞつゝまるよもひなる一に

△つらゝ考るに、共ハ上に自らなる一つの変格と云べし、共玉緒に

巻九十十丁 ろろ」へ然云て出してよろん、七巻小第柴集注中てふを片ねゞ

つるゝ」と云て拳さなれど、万葉十七の廿七ふ、たくふをゆ云ふ風

乃孫ちへどとろぶおそきの「ろ」枝え「志」と」と有ちぐハ丁そ

奥故不保 襲衣 吉 有

と云ひて若〜〜と截るゝことバ云て結べるゝそ、これそゝのみの子

「丁枝」と云ひて、なるべ」とそぢむる一つの例ある古き詞とも云ひ

つべうもれぬかし、つねハそのやゝ何の結なる詞をまれに、なゝ後の結ゝ截

つねハなゝ後のまなる截断云を、まれゝハそのやゝ何の結ひと

世ろ変格の例古ぞに二者に示せることなるゝハあその結び

もくゝつゝふ吳ろゝ変格ほりと云んかなそふとうゝん、

○栄花玉のかざり わゝ見」ふ」云云

△共行のきてのゝ句ハ、神ふかゝまて「ゝ」を写し「吳」ゝ吳ゝ

ざるゝゝこれハ上の「つふまるゝ」の並ゝハおもれど、同ゝこゝ

ハいひぐゝれど六帖の引ることゝの 引ゝこゝハ等ゝあがゝうぞおもれゝ、

○とハゝ云べゝ云云

△とゝ截断言を受る定例なれど、稀ゝハ変格と云べく連躰云を

受ゝる例も有、但し活語雑話(四六)の条ゝ云ゝゝハ宜ゝゝ事有ゝ、

彼伊勢物語ゝ上とゝ云べ云ゝ雲あゝり」の云れゝハ雑活ゝ則伊勢集異本の表ゝ

ゝ有ゝる如ゝ 落葉ゝ如ゝ云ゝ瀑ゝ」と有ゝ先後ゝ云べき類の事ゝも

同昏四編 条 小諸平の云おこせ事を牽て怠まるゞ如し 但し紫式部集

玉のをゝ分

桂八

ゝ折柄をゝ云ふきをゝつゝうゝ。きも必しも高し。と知とたいへんゝ式卷十七丁あゆ合考

○定まれる格ゝて切迫さる語をつゞくると

△次丁に、○定まれる弦び辞の格を云と有と、状条と、状類こゝとゝんをとめてゝべし、新もゝれバこれを互ふいぶゝしゝゞる人多ゝめり、さて爰にまづ単ゝる爲に付て因ゝに云ん、「とおり〳〵どゝ」のゝと上の句につくべゝうゝざること、古今秋「日ゝしの鳴なるちへ小日もくれぬ。おりゝふを心のなゝ」と皆日係、万葉ゝ珠に多ゝるを、おゝくハ「ゝ思ふゝ」と思ふゝと云詞につゞくるゝと光西山家集月淡世ゝくゝなきゝ月ぞゝりぬゝるあゆのハゝゝ。このゝなゝれゝ状類ハ稀なゝ

六帖三ゆせき「大ゆ川せきのふるゞひ年ぬゝも我ゝられん。こゝハ思ひ」も「思と八云ひ下ゞ」なれど、「ゝハを略て思と云云有、

○定まれる弦び辞の云云

△二巻のゝり分ゝも云し如く、彼「みゝの原ゝきて云」の才四句も「づゝ久ゝ。」[三]の日例なり、かの句「つゝきゝとて」と有こと誰も知ゝるゝとなるを、「つゝ。」ゝとて書るゝの有とさ記に二巻十三丁の繰分の細註に云へるゞ如し、この弦本ハ実に〳〵〳〵筆字のあやまりおゝぜるのゝこゝさるゝ一本のあるをゝてこハゝゝさらんこゝをなまちその図絵の末の巻弦せる処ゝて明なれバゝく云べくもゝ思ゝれゝゝ顧ゝ思ふに、もと思ゝとうけるゝかもゝりげゝ思ゝるゝにゝよゝて頻ハゝゝんれど勘迫云ひ玉なゝり、さて状定まれゝる辞の格をゝぬゞへて」と云へるに似てさゝハゝゝぬあり、後撰雑二「おゝれてゝふるゝかゝぐゝさむ世のゝをなどゝゝゝ。」といひてすぐ

ら」ん、日葵六、「雲の命いつとも知らぬ世なれば」などつゝしと思ひ
おろる、」、是ら八と云ふハ定例の截断云を云いるうて、などの結
びハ未なるらん」ゝ
ゝり、たぐなど云へるゆもゆゝでなどゝ
ゝりゝ切まバ殊ゆその赤ハ連躰言「ゆゝき」「つき」等なるべきなれど、これ
らハ右ゆ云如く、などゝまぐらん、などゝおろる、と云ふ照應な
るぞかし、なほ活語餘論の八巻ニ云
る事ゝをも考へ見べし
○右の音ゝともハ上ゝぞやゆなどの辞あまた。云云
△などゝ云へるニハのをこめゝるこゝや奴定まれる結ひ辞の格
をぬがへて」と云へるハのニハ殊ニ多し、そものハぞやゆよりハやく
理く、はを徒に近うるよゝし、一巻四十三　又三巻廿三　ゝり分に云へる趣き合

せ考ふべし、今こゝに、又芳乳万葉下巻に、山ほのあをきこゝそ
ゝ波もゝ云ハ、上ニのゝいひてあきといへる結びの格ゝなひさま
どゝかゝりてきゝり耳にさゝりて、ゝ、ゝ、といふ方きゝ
まり」ゝ云へる、志ゝ耳にゝめゝ侍ハ、卽ちのハはもに近きゆゝ友なり、
志ゝんどゝもゝのハぞやゆゆゆハ類へゝ辞なれバ、ぞやゆゆの本末の結
ゝ類同せるゝん猶多ゝうゝ、ゝ、その定格をたゞへて、みゝるめゝる
ゝゝぞゆゆふこれゝ。「と」きく」いゝくまぐおゝりハゝつ。「と」人とハゝ」な
ゝの如くに、なをのゝ云ひて末をきるゝ詞ゆて結びそれをゝゝと
受ゝるも、そのぞやゆの末をきるゝ詞ゆて結びそれをゝゝこ受ゝ
るゝりハいとゝ多ゝうゝなり、秋風のふきぬとゝきをいでゝらゝ系咲

○王のをくり分　○格十

のみこそ意しかりけれ（躬恒、集）」、皆ら皆上ホの乃辞ハれども、その結辞の格をたゞへてとゝ云べきなゝだや、

○そゝの言葉（古くる）と（古くる）云云

△さて今の世の人のよくつゝひ惜るゝとなる、その每別殊ホよくゆゑべし、秋の花又ゝまかつゝ」ゝ詞書して、紅（と）く（し）みもて（伊勢、集）」、おれもゆもあるめ秋のゝハゆきもやらもぐくまるゝともあるくゝて来ゝて」ゝて、往与還（ユクトクト）ゝハうらぐ、源氏関屋ホ、ゆくゝくゝときゝめるゝき俗をやゝてぬしあゝとゝハうらん」ゝ有も同し、是を源氏君ゝ空蝉ゝの往与（ユクトクト）来なりゝある註ハ、与字の意なるゝハ、恋連歌を文るゝ字のゝ云ゝに心つゐねばなるべし、与字のゝろのなゝバくるゝゝと有べきなるゝ、そゝこのゝそゝの意のゝ詞をへゞてくつゞけたるゝ、万十四（六）妹がゝも解く登結ゆ立田山今こそりみちもめたるゝれ」ゝハくゝそゝりみちもゞむの意なる、夫もゝを考へべし、序にいゝん」ゝ、二つ有て下に文る処を二つのゝなるゝ、文章ゝハ、古今序の、ゝ文たゝしゝふゝそ今もゝ、伝ゝれゝて延喜（ゝ）」ゝ有て、伝られゝをゝつゝるゝゝしゝそゝのらでも、だなゞも、凡て上ホ二つ有を下に一つホ文る文法のゝし、

占今集新釋一巻に審らなる、又万九（六）葦屋之宇奈比處女之奥擧手往来（ユキクトミバ）跡見者哭耳之所泣、ゝハ往くゝて来ゝて」ゝ二ゝ、ふゝひ云へるゝゝろなるを、ゆきくゝ」ゝとあり、故もつまりハゝそのゝろ、

○玉のをくり分

○そゝと訓字のこと云云　ことを畧きて「ゝといへるハいといやしげまこと
ふゝ云云　好ましかゝぬ韓コもん、

△坎雖字の意のことをとゝのこいへる例、や、古くもこえゝることゝ
まて、あるがちにいやしたきこえどゝ思ひられバ、さのこゝやぐるし
とハ見えぬも心うゝなれり、其古きゝ云ハ、日本紀十三「さくらがゝに
しきの花もをときさいてあまゝゝハ泥受迹たゞ花とよのミ、花ち
数多ハ寐ぞとを」の意なるめり、万葉十一六獨寝等茭枕目ハ方あや
むしろ云云、同六左璞之年者竟打数白之袖易子少忘而念哉、この等がを、仙覚本
のまくなり、之を妹まゝそこれバ、竟の訓様にしくゝられハクレヌと訓むべ
くゝそこの枕ハいとゆるとをとをとめこいへるなりと云べきまも似ゝる、尓也ゞられて
なをよゝかへて、袖易子少ハソデカヘレコラゝ、竟枕をクルドゝよむべしとそ思ふ、枕
ハ虚より洪音字故られを清音のゝにつゝへるハ少く、多くハゞに用ゐられバ、その例ゝか
なふもよけれバ、之ハクルヽ上のよゝハよゝらゝ、されバクレヌトとよみて、こゝを石獨寝等作等
とゝ同じゝとゝハ又るべゝざるなり、又古今寂蓮筆エア屋代氏所蔵一本に「枕ゝぞハ」ゝとゝ花とみま

ーや」ゝみえたる等も、一ゞむきに脱誤とのミハ云まゞきゝ所なる方万
葉の云ゝりぬゝ」、日本紀のあまゝゝハ孫ぞゝ」などに例知るにゝと
云んも不可ゝさらん歟、さそ又ゝにものそひてゝ云へるにをゝめるを
ことを畧きそゝこいつゝ」ゝ云へるハあゝまさへし、
○古十ちゝ訓きおりひやなぞ抜ゝとあゝかきの云云
△古今集コハ人ちもぬおりひやなぞゝ」ゝとゝれゞ、後拾の云
とふゝ覚えたがへてまや、又ハ古今集に吳本有てまや、そハこま
も、坎なぞゝ」のゝ助辞とまるゝ、古くハ顕注あゝうより打聽お
ども然ゝとなれゞ、此玉説ゝ作の遠鏡小哉ゝる横井千秋の
考へん云ゝてハ「なぞゝ」ハ例なゝれバゝハをの誤なるべくゝぞハ
ア火コ行ゝぬ品ひのなぞをかゝ」などゝ例あれバゝとの意ゝて別なり、

されどそれよりゝとハ思されぞ、その故ハ、まづその例ふせる分ハ、
「おりひの」と云ひて、なぞもと云ひ、それ〳〵応して、「淀の川こ浮て
もやらん」と云へるなれバ、りとようく測ひて、まゆるを、共分一本
の才二句「あゝぬれりひを」と詠めり、それこそハいよ〳〵なぞもまゆ
やそきなり、のよりハおもうるやと、又それよりおもきなそもと
そもりゝなる辞二つの「やおぞも」より、「をようのあき」といへるところへ
かゝまらんとハ、さる例ゝりやおぞつゝなし、されバこハ、こに即ち六
帖ゝハなふぞとあそとりなし」といへる、その方によりてなそも
ハなふぞの誤写倒字とし、「や」ハ「なぞ」と問ひ答むる処こそきるこゝ
て、さるハ四巻六ゝふ云ふる、加とろぬ「や」なぞ」「てひしき」「や」なぞ」とう

に留まる歌と同例、なほいまゝ、後撰なる「ちゝゝあき思ふ」「や」なぞ」
とあゝ多づの孫こなくまぞこあハそゝひしき」と見えゝるも同し、
「何」ぞとなぞ」
なるハこくにもれもち、「なぞ」と孫ふなくといふきゝれまゆゝ、その
きこゝ〳〵バつゆのとゝり」と云へるによれるこて、そこハきこえたれど、
然るときハ後撰の歌のかゝに不審ゝり、古今の「ゝふよりのあき」しゝゝるハ「ふ」
れバともふよりのゝのをきしむまぞゝるとゝ
なるれど、「ゝ」ゝ「ゝ」の孫ふなくまそふゝるぞこび「しき」のかゝり処も、
二巻十六ふいまゝ巻「巻ゝさび」「あき」の数ひこゝそこをは不調哥こと云ふべしやと云
ゝんふ、げふこハいぶゝ、これを不調とハせじとなゝバ、他しき事ゝ
「なぞやうの餘情をのこれゝそ、ゝじと続く詞こそ「あき」と云ふて

截るゝ語にて「ひびし」も「ひびしも」と枕詞ハいたぶりしぶき限なりとも云ふへきゝ、めとよう「ひびしも」と枕に云ひてハ、一首のおもむきまことゝくなるとハ誰も知べし、かゝ云ふハ後撰ふるゝれる傍の海めたり、かゝくにこに出せる古今のハ、初句「人もとめ」まて、二句のなぞと「ハりとる」ふぞとこにて「や」の辞ハをきまりて止り、末の処ハ「ふよう」「のをき」と本末結べるなりと云んぞよろしかるべき、さてハ○一つの「と」とそこに出せハ、さて次の二首まてもひるへき歌、

○「とがきつる方をたゝまほしみてのちり」「とまぐふ」

△「をハちりとちりまぐふ」と云意と学ぶるを、次に引る夏之条乃末「ど」と思ふこゝろもあき歌ちゝむちる「ゝ」「ちがふ」ふさるちりの「を」

といへる「を」ハ聊異なるやうなり、「ちる」ハ截断言なれバ「ちるとまぐふ」ハ「とて」なるべく思へるゝを、「ちり」ハ連用云るりまぐふのこゝろならん、「ちまバて」

さて又歌仙家集二家持廿二丁ふ、又聊異なる歌の「を」首、次に云べし、

○「とがきつる云云ちり」「とまぐふ」

△上に云へる如くこハ「ちりとちりまぐふ」と云意ならんを、斯く詞をかさねハせぬ方ならんかさねいへると同く、そのこをつよく云へるハ一つのこなり、このこ右云やうに詞をかさね云間ふおるハ、ものそのことをつよく云へるなり、但しあるこゝろ云ときハ其かさね詞まぐの一つハ躰ふなして云ひ、次の一つハ用ゐて云へるなれバ間にこのゝかくてたゞにかさねいへるとハ其趣き少し「ゝ」かゝぐ、抑間ふこのゝ

なくてとハぬ〻〻て」など云ことゝをべて黙しきそれを云ふなる
を其百へいえゆるゝ。りじ遠多るハ〻ぬちゝ。ゆちふ〻ちきゝ。さく・ゆ
ど云へるこれなり、このゝ。ハふといへるも互ふ似通ふめり、そハ〻ぬちふ。
ゆつ。ちきふ。さき。などろよハ〻べし、ぬまふそぬまゝ〻ゆハかもゝ〻ぞ」
とやうにいへると、時百にしぬれ。ぬれぬる云の義ハうもゆながら だふ
ちゝもちゝ〻なん、」伊勢集四十六と云へるとゝを合せ考るにいづれもぬま
たる」と云ふてゝをつよゝ云へるなり、さそこのゝをこのりてり へ出し、
又ふ。を此下二十二丁わゝりへ出して、かれもこれも○一つのゝ。○一つのふ。
ゝ標して、示しつべきゝゝこれハ思ふなり、猶よく考ふべし、思ふ集九州さもゝ
もたちゝ。ゝにゝるき。ゆゝハま
ゝなゝ。ゆもゝひゆなゝら義、さて上の件ふ引古今五、ふ〻ゝ此このゝの

ちりゝ。まぐふ。ふ」ハ今一説松枝翁ハ。てを。に誤まれるふて、ちりて。
まうふ。ふ」なりとこれハあぐやるにきこゝ西といれゝるゝとなれば、古
今集をゝくゝハ此説用ゆるもいるべし、されどちりゝ。ちりまぐふ
ゝこれバ方ゝ。ゝ。ゝ。」の処つよくなりて又よきやうにも思
ゆるゝなり、おゝくにいふ万二の四ふ、鴨山のゝゝ
不知節の事のさゝめをも考べし、
○あぐゝ思ふゝゝちる[ゝ]まかふふ、
△上に云へる如くちりゝ。」ゝ。」と、ちるゝ。」ゝ。」とハ、ゆるを用に云へると雅ふ
ゝて云へるゝのけぢあいるを、此用ゝて云へるゝ海ハ日ゝゝるゝ、
ゝを。ゝる詞がくまぐふ。」ゝ。」ゝふゝゝ云へるハ用語なるを、これをゝ又雅
云に云ひなゝて文ゝるゝりゝそハ家持集ゝ、あゝろへゝゝゝゝそふつ

きとし河辺のたつきまゝ乃もゆれ、板本ハ「絡」字本ハ「まつよ
ひ」いづれとも難にいへるなり考べし、紡ふ」と云へるとし「紡こは」と云るも
語ハ円くとねど波行の活用ハ共に四段の〈

○お射へ〻いふ

△爰に「爰と、秋と」など雅言を交る例のこゝ所げて有、按ふと
り〻ハ截断云を受る定りと云ふハつれ、のとなるを、この與の字る
并及兼などもあるこの意のとハ、凡て連躰言を交る定りなり、拾遺なるこ
くゆあるとれそく〻るく。と」の如き是なり、さて又こゝに引るちり
ぬ〻ふ」の哥の如く、「方ハと」と云へる例もいる中ふ、万五十九阿乎夜奈
義烏梅等。能波奈乎を乎かさ〻のみその後ハちるぬるもよし、つい
云、柳に花とえ〻ふつれにをさ〻いきぬこなれど、なきとゝハいらば、催馬楽大路
に、於保々知介曽比天乃保礼曽安乎也支加波名せゝ伊未左可利奈利」とあ〻於ある

へし、と云へる如き八「青柳と梅の花と」と云べきを斯云へるとて、殊
ふ弥くぞ関えたる、

△さてまゝ考ふるにこの○とよ十六丁の足たりに今一つ○又一つ
の「と」と出〻てよろんと思ハるゝ、そハ万二四十三「鴨山のいそねしま
けるられをかも不知等妹之待乍あらん」此等。りゝハ「ま」と云
ふ〻べくとぞきこゆる、此若狭の方云などゝハ今もつれふ云ふ所と
なりされバ此万なるも不知而の意と云て、嘆りやもきこゝ紀に、
猶考るに、又万四初「よのあくるをまみおりひつゝ寐宿難爾登」ゆゝ
しつゝくもなどゆる処の登りゝを、之豆の誤り歟などゝ云ふめ
きど、さ云までもなく、登のまゝにて、こハ之豆の意のとなりと云ひ

て宜べくおもえるくたり、上に云るち「ぷ」とまうふ「ふ」をぢり「て」の誤とおるもよきやうなれどそれと同の語勢くハ行〜ぢ濁ふかく不知而の云まそ、ぢ〜ふと」と云へるも宜をまよ此不知等妹之」をも、御風季雅なと八ぢ〜ぢ濁「て」と訓めり万葉類句ゴ万ゆ、

○おやよ我と」とち上ち切る〜接乃辞云云

△此と殊ふよく意得至へきなり先につき此こにさゞめ〜りせりと見しきことをなれ、そハ既く二巻八丁ふ変格とて「ふる書ぢみのしろごろを云おごろうれ「ぬる」の類あまをを示せる如くして、此と受るゴも、その切る〜接乃辞」をゝぢと「づく接の辞」にてゆりおゞ〜と」と変ること有とも云べき事と思也、但中務集ある「あまりおてうひ有ゆりと思ゴを恨てふる。と人やえるらん」の歌れふる。

とちどを彼玉緒二の十丁ゴ川孫氏爰袴ある「いもせ山云云ふまゴとひろる」の

如くゴちぢと恒例の格ゴえつれ〜る也と思ひ〜ろどさ紛ゴてハ非りゆゴ式事既ゴ八丁ふも云つれど尚云ん、雑話四六条ゴ引出し古哥どものゆゴ中務集のハ右ゴ云へる如く也又伊勢物語の

を初め多くハ誤写とゝぐきともまゝ〜ゆれバかの「あつくる〜」と」

といひゆんハかゝと語格ゴ精〜〜ぬ誤と謂べきゴぞ有ゆゆ式外ゴ

ゴぢと連躰言をとと変る例ハゆる也、活語餘論八巻ゴ荘周ゞ

夢ゴ胡蝶とあゆしとい「へる」ハ」と書る文のこと云へる條ゴ云

ふゞ如〜さて此ゆ〜ゆへ、

△○「一つのと」とゆて出すべき類ひゴハゆ〜ねゞ、序にいゑん本宗

の和讃ホ、ハレコレ故佛トアラハレテ」と云ふゴの宜状と文字ふと

これハかゝる用ひさまの例知きがゝきに似ゝきど、これえ恒のと
なり、然るにアラハレと云云を示現・他現・などの様にそるかゝ
に、とゞをゆえ易くゝべらふなり、乞ハアラハレハ露顕と云人が
如し、古事記或ハ塩嚢抄に微して辨ぜること、有人の記せる語辞林香
記の如し、（抑云ハ、故仏ナルト云コトガ　と俗訳してそなよん、）

○やを免辞ホおくを

△此をゞ言ることき八、その末の例犬方ハ略図ていをゆる希求
の詞、又ハ将然云をうくるんまていひそむるぞきづハ自ゝの格
りなる此玉緒に引るとをきんまをきをハをおりへとをえよと
をいきんなど考ふべく、此外ゝもれてんと云ゝ又けせてへめれ、

或ハ孫こ、又ゝこそこせの十二のうち欲ゝて應ぜる例ゝそおも
えるゝ、さて休め辞なるこ勿論なら、希求云ゝて應ぜるハゝこれに
もいたゞそんゝ應ぜるも亦聊歎息を含めゝを越もトの意ゝ
やうのこも、よくゝ古書どもを視てさゝるべし、抑下知希求み
ど云ふべき詞ハ、まゞハ八衢上カ　又ナ　下ユ　小みえたる如く、四段の
活きのけせてへめも、又加行奈行の変格の活のこ孫さそハ一段中二段
下二段他行変格、それらの活きの連用云に添へるよゝ是なり、
を外ゝハ総べての活きの連用云に、こそこせなどいひ添へるをもト
知希求と云ふべし、（祝詞ふくゝかりにつげこせ、るの義ゝをつぎそええこそ、）
をべて（けせて孫へめも　てよこそ）ある中、いをゆるやもめ雉のを拭受けたるまえ、

いつも此十一の希求の詞と彼んの十二とを相結ぶとくぞ思ハるゝ、
但し来往こゝなどゝて意じたるをおがえぬハさるりめとて四段の活き
詞等の中ゝる、せてめの三つなる八今思ひ付らされど、此せてめ孫
この五つの外八、行れもその例をでに明なり、其けへまよのやつ八、此
王緒に出さる分ども、そもそ先っらべし、「さやの木をなき居こふをかりへ行
らんとをられ、そ居うゝをゝ」
今一つこそにて応じくる例八、万葉五十二右 現木大あしゝうゝもなゝぬ
え玉のようるのいめ仁越つきて見延許曽ゝ有など見なり、さて彩
のをハむその末に命求君ゝんゝ行る絡なりゝさゝりてゝられ八、此書次下十九右に○和ゝ
をゝと出せる古六の分なども、たゞこの五ひゝくハ下ゝをおり」と全く同例と云ふべき歌
ゝれ居ひ、ゝとゝ安ふさゝ八行ゝさゝこなりゝて、
もゝと用ゝなるところゝを下に至てあゝ云べし、ゆて先ゝ大ゝ八此云如くなれ
どゝいゝりゝ稀ゝハんも下知めゝ世間ゝいもやる詞どゝもなきもゝり、万十二九うつ

せみの人めゝげくゝぬゝを玄の夜夢乎次而所見欲見ゝ見らなり、たゞゝ
是をかくゝ「ゝまかゝ」と訓八、仙覚本に然るに从へるなれど、文思ふに、欲
八むに当る正字なれバ、所見欲を三エナンゝ訓むへきゝもやらん、
さ訓ていよゝ能きこゝ也る奇なりゝ、然らバをの聖応いえやるんゝ
てあたれバ此やゝをめれをハ、凡てけせて孫へめれこよこそこせんの十
二ゝて應ぞゝいよゝ限り云へくゝや、但しけゝらゝのゝにて八応下難きなりゝよゝゝ分ふべし、
○木ゝ毛てゝを
△此條かゝ標目八一つゝて、その木ゝ毛てゝを木三つゝり、抑ゝれさゝ
にゝゝハ、此一條ハ除くへきゝ、いゝゝとなゝゝハ、ここに出たる二首中ま
づ其一つ、古六の、「花乃いろゝ者可まゝ毛てゝ」の八、上にいゝやるやゝて

免辞ホおくを」まて、あしくハ志ゝホ「を」おり」と同例ハ志ホへのへ
まて応ぜるやをめのをならん、をべてやをめのをハ必その下にんよ
けせて冰へめもてそこせの辞ゝりて応ぜるとなりと思ひしゝ
ど今又考るにいをあるやをめのをハ、てつゝホとなどよりつゞ辛る
大ゝこの字りなり、但してハ明に多行下二段活の用云の例也、此外
まも今假ん寄に、をべて連用云をも此をそうけてよけん、さて其
てつゝホこををと交ゝる例ハ、此巻十八丁なるゞもをみて志るべし、
凡て加をとやうに并云のさゞうなるより、たゞに休めのをへつゞりる
例、ホゞ又及バをと云べきゝとおりふゞうへホ、伊勢集なゝ云、続後拾
まも出ゝる、彼抽の註考にだゝだこホはへ云云て除るあゝ云ゝ志ま

ゞホ免を」と有ハ、已ニ（ステ）ホゞ此古今なる「かをゞホホ」のホこいとよ
うおぼえたり、されバ次に引る後拾の、「を又て人をとうれまゝ」ハ、
けホたゞへてホにを又をゝ云ハよきさゞめなりり、但し志ホに
を又中ゝて、古今のゝ後拾のゝハ又聊のけゞめハ引るとゝハ拾おも
ハるゝなり、其故ハ後拾ハ「みやていづる云云を又て人」「をとうれまゝ」、
是ハ月との古六の「かを」「ホ」のをと云バへ美なり、是ハ古今にも人
をとうれける」などをりゝいへるゝ、ホと云ふべき処のやうなれどホ
ゝいへるとハ差別ある処ニ用ふ（シカ）をなり、さハ「ホこを又を」と一むきに
のミハ云ふまゞゝこハ「ホこ」といふへきに似て拾ときあるを」などいひ
らんやよからん、かゝ此後拾のハ美なる疑き有、まゝ古今のハたゞへへかまるやをめ
のこゝばとゝれバ、別に○ホこを又を」と一系ニハせでハとも思ひしゝれ

どよく思へ、をちうんぐ、さて、又按、万葉十一（廿八、廿九）よろづくて君を来まとしちさやふる神のやしろ「を」祝ぐぬ日もちる」、此をなども不に似うされば（古今のこも後拾遺のこもてハ又異なる説ハあれど）これも不コ多て「を」コハ非るなりと云ふ中へ入ハきコやさて又通ふと云べしとまでハ思定がされど、こゝハ不まてやよけん「を」そやと思ひたどよハるバうりなるこゝろ、それをバ不と云へバ俗なりをと云けバ雅なりとこゝろうる後もつめれど、是列集（六十）に「あひみてバなぐさむやとぞ思ひしを名ぶまでこそ恋しかりけ「を」と有歌を、後撰集十コハ「なぐさむやとぞ思ひし不」とちぞ入もられしを思へバ、（拾集ハちぐて家集より続ぜる之なり）これ〳〵ハ大うゝ人の思ふ〳〵ふて、をと云より不ゝ云方却りて雅びり、（タシ）ゆくゝなるならん、かゝまそ

不ゝをゝ何をよろんと、今世てそ思ふゝの者も面なき不非ろなり（万葉二十妹之家毛継而見麻恩乎山跡有大島嶺爾家毋有猿尾共初三句を一云続之當継而も見武爾とあゆをも考ふべし）古今集に「たむけこゝつゝめそゝくもなるべきこゝろみちとりあへず神やうへさん」とあるも素性集コハ、「きるべきを」とあり、それのゝそれをげコをゝ云ぞきこゝろつゝと思ふれど「きるべきほゝ」と云ふゝ優る也、拾集コハ不ゝと有なるべく、上にいつる是別集なるを拾後撰コ不とせるもそゝ此古今に倣へるゝや、又ハかのづゝ同じさゞめとなりてのゝゝやかコうくに不ゝ云方の勝るも無るべしやそ、

○古ゝ集の約ちなどゝこゝとさをゝ有歌集のゝコを有

△上に云へる如く後拾の人をゝうれまゝうバ」と、古今の「かをゝ不ふ

ホ〳〵」とハ全く同きヨハあらねバ、こゝに狀を「と云へるこの」と云詞ハ後拾のをのゝへうけてゝべし、後拾のに同きが古今集詞書にしゝ云ふハ詞〳〵さうあて人をゝかをけるゝ時ホき「君ゆゑ山のホとりて人をゝるゝとて」、芝らのゝとなるべし、こハ哥に「君がゝゝれをゝくめよ」とゝられハ送別なり、留別ならハ人ゝゝゝれ」と云ひて、をゝとハ云ふまゞきなりと、新く留別と送別ゝてをゝとホとのけぢめ有りしハ誰も大ゝゝ云うめり、古うれども然ひさぶるにハ云ひがゝれをり、其故ハまゞ要之集に「元さゝゝゝ行る事をきゝゝゝて本へうつるにまへヨれひゝる松と卅とをのゝて、一本ヨハ松卅を又ゝとなり、と詞書〳〵て、この詞ハ古歌ゝに我ゝ去て世ゝに有てあれバゝこハ留別ヨこそ云れ、此日七日又べ行ゝとまかもゝゝるゝ

松と卅と孤ゝ（いまゞゝとゝる）」と有ヨて考ゝべし、松卅ハのゝるなり、ゝれハ也くなり、古ゝるに「松と卅とホ」とハ云ひたゝゝゞ、さて万葉へ廻りて見るに、二十巻サ「たゝゝち孫の母手ゝゝてまことゝれ旅のゝゝ本にやまく移んかも」、手の字コとよめるに仏ひてハこハ母子と云と大云へゝれど、狂歌しゝ云ゝ、されど古今遠鏡小附註せる千秋の説の如く、ゝゝながちに和をゝ行なしとのゝも云べゝゝざるなり、その延きハこまかに心を用ゐバおのづゝ明なるべゝ、留別ヨもをと必云ふべきとホとホ云べきとゝゝ、送別もさやゝなり、されバその別ハ行なきにゝゝゝゞと知べし、

○一のを

△古七云云同十五云云、これもゝれさきヨハ、古七なるハ武ゝゝ年を

るぬを」の意、十五の八、「行ふとをこひ渡る」と傍句にかゝる処なるにて、
別に「一つのを」と云べくもあらじかと思ふハまさりき、元輔集、「あふ
ことを志だしもふれハ白雲のつりる思ひまききえぞ志ぬへき」、公
忠集「あふことをよしにつくくてくれ竹のふしのかずなきこひもする
るかな」、蜻蛉日記巻末に、意を「たまひてあひてハ孫しあふとつくる交
をさめてハ悔しかりける」これら何もも指云事も物もなきをなき
り、さてハ別に○志て「一のを」と云ハざるを能ハざるなり、斯て又思
に、「塵をたまき為じとぞ思ふ古今麦」とよめるなども、「塵をする為」と
かゝるところよりハちりぢりにす為に云ふ意まてをハ行ふこと
を。なかし「けれ」などの小同しと云へき歟、さて此辺りへ、又○一のを

と志て今一條加ふべき歟、又ハ○よといふま似たるを」とやらにも
をもよろんかと思ふをあり、左の如し、
神代 やくもたつ出雲八重垣つまごめにやへがきつくるそのやへがきを
万十四八 わもうびに志くれの雨ハ降られと天なそもれて月夜清鳥
万十二十八 あし川の山より出る月まつと人まつとひていまつられ乎
後拾十一 これをみよ人もすさめぬ恋すとて孫なる虫のあまるすなかさま
かうやうに一條加へてよろん、但し万十二の八、「これを妹待つ」後撰の
ハ、「恋がさをそえよ」と上へ及ぶるにてつねのをなりとも思ハんか、されか
まハ下のしで、七巻廿八本「知らぬ似たるを」と一條を示せる、即これなれど、吉風の歌と限るべきにあらざらめ、なほこて出ますべし、万十まか
え上へ及るとも云ふまじくて、たゞ歎辞の「やくがきを」と行ひたぐ

へるにも、さて又今一つ、○一のをとゝ志て被孤をいとみ懐をゆみま
どのをを云ふべき歟、これ〳〵ハ後ヨリ少〳〵云に成るべし、懐ヲ孤まゝ孤まゝとゝ志てこ
なきのもあるのも日云のべき類なるべく歟、ゆゑ山の風まさかりとよめるやう、狀和ハ
なり、かゝるべく不一つ別なり、

㊀万十二十我命之長欲家口偽手好為人手執許手」此手ハ又一別手、

○〔示〕

△つねの示と云へる中にも、へ〳〵云ん手ぞと云ん手とたゞく
ちうゐもろ〳〵ゐれバそれハ一つ拳示さんぞ也しかるべき、そはい
ろに〳〵云に古今十八示弐を持て山〔示〕いろ人山まそも云いつちり
らん」これを狩恒集ゝそられバ弐をうし〳〵山ゝ入示〳〵」とゝり、狀
示りと、古今に又、ゆゝ山ぞなくゐる云「弐のうさ矣云云ぬ

山海ぺいらん」ハ云〔云〕〳〵云へるべ〳〵、互に亜へるさゐなれど狀〳〵彼
〳〵を主〳〵てられバ皆ゐゆゝしうろ〳〵なるゝ味ひらるべし、件の
示の端も、古今ハ山のゐゝしのをとべつろ〳〵ハ〔ろ〕とゝ者、家素ハ
弐を根て山ちゝまうる人。つろをを」とゝり、狀家素なるゝ上
の一つハ山ちゝ」〳〵有べき校ゝも思える侘玄卿に、ゝとゝ〳〵の論弁
の行る、皆謂ゝてゝる事なれど、狂歌ハ弐も者ゝ、即狀古今素なる、
山。いる人」の。家素の端書れ山ちゝ。の。ゝなど雑考べし、されど
次の詞ゝも依るべし、入るゝ云ん」ハ弐〳〵も云云へゝと云ゝ〳〵きゝも、
狂代論矣〳〵ゝ〳〵ハ題ゝ〳〵〳〵ゝ名ゝるりのにいゝ、元捕素十七世を持て山ぺ、
人〳〵ゝ〳〵」や又古者山つゝゝ山ゝ山ゝ侵ゝ〳〵入いそ素ぺ告やらん」これら
の別を考ふべく、又用やあ〳〵ぬのハ也、古今ハ示」と
あゝゝ伊せ物語ゝ」示」とゝ〳〵ゝる等をも考べし、

○ののをとけよ尓近き尓云云

△咲きかく尓　かもうぬ尓　などの尓ハ、俗云のノニと云に當る、云てよけん、憂きハいづれまでも歎息の意を含めり、よく味ふべし、

尓と云次へ譲訳せバソレニテアと云俗云を添へてミれバ意得易し、

○なく尓

△こハ　ぬ尓　をさのべたるものとの説く人多かれどさみこまハ語る

で、此辺成章のあゆひ抄尓、　ウカヤ　又コト　云云モセ又ノニ　、様々譲訳せる

やうハとなししこくに引たる古今集の五首のなくハいつれもぬと云

て聞ゆれど同集哥ニも、ウカヤと訳してよろしき有、さもあれども定

まりなくてなど意をつけてよろべし、万十一七丁　さも子まで悉てきた

へなみ姿らんとすれバわかくど「不所寐(イネラレナクニ)」、寝らぬ尓なりとのことが云

おきがてし、活雑七一の条に詳らん

○寝らし尓

△此尓ハ凡て　ナレ然ルニテア　と譲訳してみれバよく聞ゆるなり、

活語指南初巻六丁　考合すべし、天徳哥合夏艸　忠見　なつ艸の中を露

けみきまけてうる人寝らし尓志ゐる社へ「ぶ、寝らハ件の譲訳当らぬ

やうなれど、能ふれバ猶　苅人あらバ志ゐるも恵まはしさる方もあれと要すきまけまで依て苅人なし其ままあと云意で、同意也、

○一つの尓

△まぶえぬ人　尓　ちまくもをし」ハ、ノタメと訳して、見えぬ人のため

まちまくもをし」の意なりと云べし、ただ夕メとのこと訳してよ乾

もりの、方十五九丁あをホよりうゝのうやあにゆゝくもかも仲拔ふゑ
ゆみのとまをつけん[ホ]、又かつるさゝいもよみせん[ホ]わらゆみ
のおきゝもゝむゑりひてやうを[ホ]、巻らの[ホ]ハ〻為とおてゝゝきにゆ
らんや、又栄哥合悉皆能因玉髮のゑもかゝゝぬ高ゝとてまゞゝえぬ人
[ホ]系ぞ色めゝ系、この[ホ]ハ、殊コ右に云へる如く、人の為ハとゝゝて
こゝゝれハ堂えホゝそおもゝる、

右一廿

○一つの[ホ]、このゝゝ〻へ今一つ、○一つの[ホ]とおてぬゝをホそぬゝを
し」なゝゝ云へるを本ーそよゝんと思ふよ、上十五丁○一つの[ホ]の処ゝ云
へるが如し、「神奇自そハあ紫もいゝなれやけるとゝ[ホ]ぬゝを[ホ]て
そゝゝれ順集、「橘むゝゝ[ホ]ふるゝをみるゝ人の衣ぬゝゝき色ゝゝなく
[ホ]素之、狀ゝゝなゝゝ、さてゝゝと云ふに色へるやうなゝゝ狀ゝゝ[ホ]ふ
ゝ[ホ]ゝきゝゝゝ」なゝれ[ホ]ゝこハそのことを、ゝハ、又異なるゝゝ[ホ]ゝ
うてをゝんとおれ」などいへるゝ大方同ゝきに似たるを[ホ]
みて」とやうに云へる有、されバゝ[ホ]ゝ色へるに似ゝる中ゝて、又二つ
の別をゝゝゝとハ云なゝ、さて又今一つ、○一つの[ホ]、万葉三巻ノ今
代コ乐くあゝハ来んよコハ鬼コ鳥[ホ]も[ホ]れハ成なん、[ホ]ふゝゝ
たるゝハなゝれゝ、もを一つ云ひて二つの[ホ]コ及ホせるなゝ、さて
又一つ、○於遠とふゝく[ホ]ぬえれゝりゝ[ホ]ぬゝ色ゝゝのゝ
たゞ色ゝゝゝぢ[ホ]、これもかゝりたる[ホ]コハあらねど、云ひさゝて
のゝる云を含めたるを、色ゝつの例ゝや云ふへゝらん、さて又一つ、

○「さくを花にみる」など云へるハ、とに似たるなり、然も云なりて
ゆけバうちれるなどしれど、さてまゝ二つ、○万六十山高三白木綿
八十二。花落多藝追瀧之河内者雖見不飽香聞」同十一右泊瀬女造木綿花
三吉野瀧乃水沫開来受屋」是らハ「花の如は」と云ひ「水沫の如は」と
云べき歟、「さく山花の」として「涙のこぼるゝ」とよめバ、例のの如くののなり、されど古訓ににとよるまてそのにのの如くうるとはく知るも如くに乃
如有と云てよらん、同十一廿四又十二廿七に、朝影爾吾者成奴ゝ衣云云ひさしくなれハ上児由ゑ四十二是
らも親の如くなり、
○「流るのて」ハ去と為るてあり
△是ハうごかぬてを云なる「へし」がくて云云ニあとのてハ、「つる」「つれ」
と活用するをなきなり、それをつねのてと云へるあめり次下○

てき云云と云へるハ、「捨て」「交て」などのてと同く、多行下二段の一乃
活語なり、然てハ、「てしが」など云それ、その動ぬてハ然らざる者と
活雑三編廿六丁にすべててをその四つのうごくと動かぬとのを
いへる処をこそ明らむべし、
○「にて」
△爰に出せる九首のにてハ、上にをと云てにてと云へるげに一つの
格と閲するを、このにてハ皆辞語を交へるなり、おとハ用語をも
そを辨云よあてかそれ交るなると、「露けき」よすがなきなり「にて」
ふじ路なりを、其の思ひにて」などいれも「夜にならるゝ」を忘るゝ、
「にてむ」のちぶさをかむゝ「にて」などへ聞きつて曉るべし、さて然

外に、ゐひ、ゐて、などをバ狩りしの用語のまゝ不て、其を不てと云る有、さて其不ハ、なぬ、ぬる、ぬも、と活く、彼六巻五丁につゞと並ぶぬるゝと云へる是なり、なり不、りなどゝ云へる不又、てのつゝなれるなり、さる例も云ひもてゆけバ一つ不もおちぬべゝれど、始よりけぢめなしとハ思ふまでなれ、なり、ゐりくきく不て、行く、思ひ入不て、など、文まゝも少らぬ、ゝるハ皆上不をとかゝることなくまてなれバいまゐるふ、ゐりゐ、ゐ、ゐの思ひ不て、などゝ、ゐをとかゝまるのゝハ異なれることまるし、とや云ふべからん、

○でハ、ぢ、ゝての活ぐまりゝる等ゝつゞのでゝあゝまるゝとゝ

△上二十二右不、活ゝつゞのてゝと云へるハ、上に云へる如く動ぬてのてゝ今おゝ不

つゞのでゝと云ふハそれと、かゝりて、なでを一つ別に云ふ故、それに對ゝて自余のでをつねのでと云へるものゝ、なほ、然もだ也ハよく考まバ行るゐ名けさ法なり、渭らぬてゝハ動く動ぬ二つ行れど、渭るでハいづれもこゝ〳〵く諸活用云の諸將云但ゝ略図不諸汎部乃四十行らられる中、無字標せるより下字までの皿と、將字に当る三と、行ハせて七を除きて、有字即せるより、去字かゝるまでの卅三、それも和行のみ行うゐうれゐゝの一を数へざる内ハれて卅二の活用ある、この卅二の活用云の、その將然云をいま概ゝて諸將云ゝハ云ふなゝ、を受る定格ゝて、これもゝずゝして、の約り、其ずハずぬねの用らき、そのゝハ、せ志すするすれの活き、そのてハてつゝるつゞの活らき故に、でハいつゝても用言へつゞくゝゝて、え来一の活用語なり、されバこの約まりのずゝての でハ上の清音のての如くに、恒のゝ云へバゝて、別不動くゝ動ぬとあるゝハ非る

なり、なでと云ふも、いとゆるなふぬぬるぬるぬ祢と活く詞乃將然言のなを受くるでまて、さのこつゆなくぬでと云ふりのコハあらば、されバ「で」と標したる次コハ、○でハむ〜てのはゞまりくるる辞まて、すべて あゞ然らざる語（將然云のことたろ　ゐの濁コ　てのつゝひなれの表ちく）を受る定のかゝその中まて去の時ゞくるなを文くるはゞ耳とはあるやうなれバ異なる事ちなるゞ、その云紫ある例をつゞへおく」と標に云てはて次へ、（古上三）「入る矣かる云云」とやうに、次々（彩十二の）「ゆやく云云ひつひぬ〜云云」までを列したうんぞよろ〜うるべき、

○りゆやく云云　金紫三天の川かへさの舟に流うけでのり見づ〜バ祝もふだろり、はでもなでのをなを

△次上に云へる如く、淂るでハ、諸用語の諸將云うくる定りゆゑ加行下二段の活きのうけと云將然言を受てのてなり、然るゞ今一なとれきてでと、文くれハ意ちきたるべきを、五七の字数なるりのあるくうけでといへるまて、かくる例ハ狂多るべし、忘ひまて。といきまかしきを思ひてと云てさておき、忘れつと云ふを忘れつと云てやまんと全く同じことなり、又考るにこのゝまて、たゞへバ忘れてと云ても忘たゞハぬコハあゞでも、又七白の字数をしぬ時ん忘もなでと云てもときにようてハありぬへく、おりハでまてあしきにハあらぬをも、ちゞへまようてハおりひなでと云おくやうのても、とにより時ふようてハなるべきに非るなり、かにうくコで

ハ必しも將然云を受くるとくこてろえ、なハ去の將然云なるとおよくこてろはをへきあとをり、

○な

△此廿四丁左より廿五右へかけて示せるハ、皆歎息の辭ノて、この下九ノ出る、上と同じ云をへなれど、よハをへて連躰云をうけ、なハを べて截断言をうく、奚りきなを奚をきよとハ云ふまじく、かなしなをかなしよとハ云れぬ、かなしきよとハ云へく、かなしきなとハ云まじき類ひ、底く考へるべし、

かよおりよなをよおりよなをよりやうに、いつれにもいるハ其ふりをおりなるものゝより截るくとを、ひたるかしれてこそ、

かくに截断言につく歎息の声ハなり、たとひ連躰云ても、そのやなとに掛りて截もてゝる、或ハ已然言ても、おそにくとて断ぢたるをり、此なそハるてゝり、涙氏夕良、ゝうとこそ見ひされなを、又紅葉賀小々の試乐ハ寄波ノ事皆つきぬなよく辨ふハきことそ、

○ハ截断の標●ハ連躰の印●ハ両用のをろしをく猶下上のところ小云ふべし、

○勿れ云のな

△このなのゝハ、活語指南初巻三丁もよくゝへし、凡そ用ひなを二つるゝ中ゝ、こてゝハ莫出その類なるのゝ出きて、孫ぎりは衣いろふいつなをも免の類のハ、をれるゝて省きて出さぬなめり、されど今其ゝをも初学の為に云もん、その勿莫ハ皆截断云いづいぬくるとを受る例なを

り、俗云こハ異なり、俗こハ大氐畧必なる轉用示しの段を一段上り
て連用云をうけて、いづるを「いで」る「鯛」るを「ふれ」る、又「おつ」るを「お
ち」る「恨」むを「恨」る、又「似」るを「ル」る、「ル」を「ル」る、又「み」るを「み」る、と様こ云
ひ、或ハ一段下りて連躰云をうけて、いづるを「いつ」る「ぐ」るを「ぐ」る、
「いぬ」るを「いぬ」る、「蔵」つるを「おつ」る なゝ様ゝも云なり、数本に
「いなこまろ」ひて漢こ蔵る」とゝえたる如きハ奇なり、り〜ハ写
誤ゝ、り〜ハ作者の無心ようなるゝ、凡そ禁止辞の莫ハ作用云の限
り、その自弁截断云を云る定りなり、但〜此勿のなハ形状云へ
ハ及ま、形状云まても〜及ひてをべて截断云をうくるなハ、歎息の
ななり、略必こりゝこのこゝ〜せるな、のちに改正の図こハ補入して、

とゝ「ゝ」ゝ「ゝ」やのつゝまもなゝと出せり、さて件りの作用云截断云る処
を云るなゝを、今世も田舎人ハ「ゝ」殷の活き云のかぎりハ大〜く古語乃
ふりに云を、京こてハこゝ〜く甚いやしむるに非るをりハ、連用云
をうけて、或ハえ、或ハやを、そへて云ふ「ゆ」くなを「ゆ」きなえ「いつ」なを
「いひ」なや〜云類いと俗びにさとびゝり、さるハこゝに出せる「ふき」
「なち」〜し「そ」なゞ云ゝのゝと云とつになれり、かくることをもつハで
にてゝろえ玉てよけん、猶やゝのな「行」そと云へるハ、作用云形状云
〜もに、連用の処をなゝと云て、次ふまゝ連用云して、そのなをうを
て、「ふき」なち〜し「そ」「排」ひなを「ひ」なを「そ」とやうに云なるを、そハ作用のみ
こて形状云をハな「行」く「そ」な「行」〜く「そ」とハいはゞ、形状言も㋑韻の

有ハなこともありそと云ハれぬにハ非るなり、さこ然何な何と云ハ皆や
なより句豆してよむべき多し、「あやな」と句りて、な咲そ」と豆るべ
き類なり、是を初学或ハ辨へずして、「いくな何」「ふきな」云「
と上へつけよむべきのと一つに心うらんハ非なり、さてこのな連
用云の次へ「ふきなちらしそいく」も、又連躰云の次へ「来るないひ」
辞十三ラ八「ふハな焼」なるびそ」なども、亦又躰言より「人なとがめ」そ」とやうにも、まる
○拾十六 花の名云云手[な]なふきそを云云これらハなを云云。一つ
ハ行まりて皆もいへ。
△拾遺のハ、「手たなふきそを」のたをなに行やまり、元輔集のハ、
「たちなよりそ」なりしを、是もたをなに写し行やまれるなど

ならん、元輔集の古本校せるにも、印本の「ふちなくよりそ」とあるに異なり ことこえにとぞ才三句のぎをく」とせる一本あるよしのこそたく
○夫木源仲正云云月寂蓮云云
△「引へそめりそ」ハ、かく「引こなめりそ」の誤、「引をなたのこそ」ハ、引
をなたのこそ」の写誤にぞあらん、恐らくハ仲正寂蓮の拾ひし
をあらじ、抑玉緒ハ、其ゆゑかしこきもの志り我著書なれど、さる
からに却てたハやすげに古人を議せるが、中くなるひが論多と
なれることもまゝまじりて、彼「名ハこへせじ」をバ「こくへまじ」と写
せるに从ひて、たちまちにさぐめ置てる類ひのことも有あり、然を 八六
巻十八丁縁分をこて知べし、縁分ハ波ノ巻廿丁左、「引な出だの」だの「引へ」「その」への」などにも、か乃古二
の「あや無莫咲そ」を、なく」と踊らせかきらんを、なく」と写しひが

めたりりん本もあるに類せるとなるべしやハ、

○一つのみ

△此みハ玉藻ふかるゆく、大くさハ「なくさハ無さ」「うすくさハ浮さ」

とあそだゝられバよくゝ考えらるゝやうなれどゝ、ゝなどハさ

のゝもしてえがくゝ、又「月じゝ」「ゝ」「ゝ」おきの活き語の中なゞに、如ゝ

とゝ云ゝハきこえたゞゝなどのゝ、活雅三編ゝくはしく論ぜる

をゝて、雅ふべし、

○（後式万十）天の川せゞ清きゝ信ゝ濯ゝをゝ、ゝたゞ波ゝをきぬまゝ「ゝ」

△此歌ゝくゝゝ「ゝ」ハ、次上の「此」をゝつゝ「ゝ」、次下のゝ「ゝ」ぬべゝなど

とハたゞひて、「若くゝまん」「若くみ」「若くむ」「若くゑ」と活く語の方ふて

云へるなりとれもよろし、二説の分ゝも云

つることゝども考べし、

○（古十三）「ゝ」ゝてそ神そ忘つゝ「ゝ」の左右一説ゝて、こゝ也ハ淺き而を云。但し淺

氏葵巻不淺ゝゝや云云

△爰の説ハいとゝ、ゝるゝなりゝされど古ゝ之の、「ゝ」ゝゝそハ狩

淺き処ゝて、彼式部の志けみゝおゝる「のみ」ゝ「月」ゝに、源氏物語ゝ

志もゝれるをゝれバ、こハゝゝよりその方にゝるべき欲、さるハやが

て古今撰者の紀氏もゝでゝさ思ゝゝ、ゝゝゝやゝ思ゝゝくゝもあ

もバなり、其之集ゝゝゝがり「秋の田のかゝ」出ぬまハうちむれて星

ゝゝ「み」ゝをかをゝ者ゝゝ「ゝ」ゝ「ゝ」ゝたるゝ「ゝ」ゝ「月」しう聞きなさ

ゝくなり、序に云ん、中務集に、ふしのちけりをゝけて侍所をいそぎ「ゝ」の人

ゝゝぬゝん、式ハ志げ「み」ゝ首べゝ志き処なれど、かくゝるハ繁ゝを於ふ

「ちげり」と云て、それを「うけて」云つるものゝいへバ云まもをぐうめれ
どこの分ハ然ゝ〜じ、狂「ちげ」みの字誤りならん、おくに云んこと合考、
○雜波ぐゝ云云又〜ぞ「ミ」云云
△此條ことによくよみ考えまべきことなり、次の六首右1、○堀
川後百首に云「ミ」と云へる処と合せ考へべし、但しかの「うきぬ」とづ
「ぬ」ハ「うきみ」「沈み」の字誤ならんもハかりがたしかゝるに此「あり
ミ」「ぬ〜ぐ〜ミ」などを俗ゝハ「あきつ」「矣ひつ」などやうに云へるハ雅
雅語ゝハなきなり　玉緒太平記五丁
なる弁のやゝ、なるを、今の世の分よミ文かきは、
狂男ひ誤りて「又ぬつ」「きうせつ」「小つ」「ゆるべつ」とやうにいつること
をりゝ「ぬ」「ぬ」づれもそめつハみゝと云べきなり、こゝに出たる「あひて」
「ぬ」「ぐきミ」の類、可ゝも文ゝも夥しきを考て知るべし、又俗語ゝ

いへ「ぐ」も「ふり」「ミふ〜ぐ〜」「ミ」「ふ」「ふ」「ぐ」「ミ」など、「ぐ」て不と云
「ふ」ハつ「ぬ」ぬ「ぬ」いたれざるをおのづゝ明けゝ、さてついでに
云ふ、此処ゝ引る万十二「ぬ」づさちをき「ミ」ゆゝ〜「ミ」云「ミ」の「ぬ」文
字ハ板の彫り誤ならん、方兼ゝハ引見縦見とかゝる縦た、「ぬ」
「ぬ」ともよまれぬゝハ「ぬ」〜ぬ字なれど、この分の次ゝ「ぬ」引而不
縦元、又十一巻廿六引見絶元六見などいづれも「ゆ」べとこそよむべきに
准ふるにいと「ぬ」ゝ、
○此「ぬ」「ぬ」「ぬ」今一つ、○一つのみ「ぬ」〜ぬて「ぬ」ゝて布を浦のゝるめも
い〜まなミこやをを「ぬ」ゝあまれ「ぬ」〜「ぬ」などのみハ「ぬ」と
いへるに似て「ぬ」〜無〜を浪に「ぬ」けゝるのゝなれバ、おのづゝ

別ニ一の例とも出すべきか、件のうたハ定家卿の歌で建保哥合のなり、

○よ

△「命やそさよ」「これぞよ」又「あやなよ」などハ、或ハ呼出すよ、或ハ歎息のものよと出るに限るなどありて、さて「忘れぬよ」「たれゆゑよ」二十と

ハ歎息のよなるを、これハ皆連辨云につく語なり、その連躰云を截断云にて云る類ハ、その歎息の意あるを出るなり、上の廿に丁餘分に云る如し、さるハこれに引所にて、いたづら「苦諸君ありける」云人の忘れぬよ」を、きこえし詞にていへバ、伊勢物語木、「いとあはれなるそ云し」歌ハ末尤もなよ」此方上に廿五右ニ引り、をいへる如きこれなりときつハ思ふ、上廿四丁左の分マナに云へる如く、なべて歎息の意によとなと有て、えそれかれはこ

となれど、なハきこえしことばにつき、よハつゞく詞につく、「契りきなを契りしよ、「ちりまゐりなをちりまゐるよ、「ちるしなをつぐるきよと云ふべきたぐひと、まづハ大判に云ふべし、さて万葉集「ころんなんよともにいへるハ、んハ截断連用の両をかぬる故なり、「思ふなど忘れどなど忘れずよなども、両ともいへるハ、ども思ふのふも截断連躰の両をかねたればなり、かくとまるぞまづ格例の差別なる、されど猶考えバ、連辨とハたゞしぞとおぼしきぞに、よともなしもそへて云へる例なり、ぞハ截断云なれバ、ぞなハ続きたれど、よと云ん時ハぞをぬと轉じて、かの「玉の緒よ」の歌の如く、「人の忘れぬよ」と様にこそと思ふなれど、是のこハいかなれバにか、「わすれぞなりける

ぞよなどいへる例も有こなり、又仰せる詞こそへて、ゐまへ、をこ
やうに云へるこゝハ、中昔よりハをゝくなく、よゝ必云やうなり
こたりかくさはふこまうにさぶむべきこゝ狂ひれど、大うるを、あえん
に八、をゝよゝハ用く歎息なるを、截るく詞こハをゝいひ、連くこうは
よゝそふこゝ云えおうんこゝ、やまちハなるべし、狂云ぐよる
ゝハ云へど、をよゝハいもぬハ、よハつぐく詞ふつきをかきるこにつけバ
ぞと知るべし、「ゐもるをよなどの如ハ分のを
なり、おりひ紛ふるこゝなれ、但し去ぬ世りおるる
きゐめこびゝきハ分をつゝてふ人のをゝめ」よるぐハ、ぬハつぐく言
なれど、のふかりてハ已にきるく云ゝなれるを、狂よゝ文るハ
いろにゝいもへう、これハのハぞやに伝ふたぐへるるぐゝ、ぞや伝ふりハ

やかろく、むを徒に近きゝもるゝをりくいへる如くまそこく
らものこハ應ぐたれど、ぬハ、のつぐくかゝまそ、それをよゝ云ふ
歎息のをこそうけゝるりのゝ初るべし、つぐく云にかぎれるをバ
よゝうけゝるぐいゝるきハ、順集ふ芳野川そのいもをゝい
もてのみゝゝやむゝをいもぞおりよ、主居ゝ
ゐるぬなれど、惑ふるハ連くに限るなり、
○雲中よ云云
△爰ふ十三のよを出せる中に、雲中よ「むのをよ」「ゐぐゝよ」の三つハ、呼出
しのよゝ云べく、「おぎうぞよ」「おわぐずよ」「おもぞよ」「ゐうみぞよ」「ゐのだぐ
よ」「わもれぐよ」の六つハ、歎息のゝ云べく、「ゐもるをよ」「ゐゝへよ」「りゝをを

○五のぞくり合

○雄ノ廿六

よ[illegible]〜[illegible]よの四つハ、希求言を狂つよくもるよなどゝ云べし、此三つ云ひりてゆけハ行もも皆歎息のてゝ[illegible]、さ斗ハ異もうゝざめれと、右乃ぬ分ちもえべきもを、但し[illegible]〜へよの「え彼四段の活言の方四音ニよを添しまう淡世七丁ニ云人趣き考へ合べし、

○よゝ

△爰に引る指三・狭衣・同・の三首のよゝに二つの別りり、拾三のおいすゝるよゝハ、たゞ歎息なり、此よゝ、今世俗言ニもりり、望し云なる浮木のに、いでその時の浮木ハ栴檀松ふて有〜よゝと云へるゞ如〜し又るゝ[illegible]などゝ行れも連辭云なるをよゝ[illegible]とゝくるなり、さてかゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝきせよゝと狭衣ニ云へたるなども、よハ希求の云、それニゝ歎きをそくて、希求をふくせるなり、但し歎息

も希求も云ひりてゆけバ同とゝもおつめれど、おいてゝるよゝなどをうち任せて希求とハ云べゝぬおもむきなどゝよく每ふべきとぞ、さてついでニ云ゝん、かく希求のよに歎息のゝをつけてよゝてよゝと云へるハ雅語なれど、同じ歎息の多有〜、やをつけてよゝやゝ云ハ正き寄文ニハ云えぬ、漢籍読に、懇哉、歎哉、などを、つゝめよやゝと訓ゝなゝへるにひりれて、字などにそれを用ゆるこゝと勿も、漢籍読のゝ、古語によく契ふとゝ〜めゝと等のゝ山口栗下巻ふ不のゝ、いつりなる序妻くハ和読語路撒ふ詳ニ云ゝさハ殊ニ妥ゝるテニハ代論めそゝし、

○ゝ祢ハ云云　「ゝ子ゝも祢よゝ云ゝ笑よくをゝ」

△れて下知の詞ふよりゝそゝるゝ、詞の八ちまゝ上尭もなふ説の如く、古くハ下二段の活きニもよりゝそくゝ例ゝるを万葉に

のもろ寺等より古今・源氏・和歌ろ迄の正格を考ふるに、先ハ其よりじ活、
ざるハ四段の用きて、そへるハ下二段の活と大かた別きたり、但し源氏より古く
段活きの第四音より延る活ある例ハ、あまきこ有るべし、然る母後にハ復彼四段の活といへる語等の第四
も宇津保などに
音にもよりじ活くるも少からぬなれるとなれバ、称よと云との例る
もその類ひと云へバいちれぬべかれど、なほげにようしきことハ
きこえぬ、さて又この仰せる称ハ、すべて連用言を受くるを、又一
つ、将然言を受る称あり、そハ「形ふ言の称」と云へし、あへかも類
言のハすべて将然言を受るがありて、仰せるニハ連用言を受くる
あんけるを一巻四十三右のくり分ふ云へる如し、それと合せ考ふべし、
活雑状編に弁説ありてみあん
相のをつぐくまも旧著四編下、

○やさめ辞の志
△跃志げ小云くハ下にだと応ぜ、但しそれより三つの別ありて、一ハ将然を受る、
二ハ已然を受るなり、爰に引る歌にて云えど、古二「まてと」いふに「いり川まで
り」「萩芽乃如く風と」同九「名ある志おちて」同十「去處」此六首なるハ将
然言を受る也へかゝる志にて、其外の十一うたある志も皆已然言を受たる
もへ掛るを、此将然言をたとへて応ずる志ハ、「ぜ」にといふ意味あり、已然言を
をと受て応ぜる志と、事物を随つて定る疑ありて考べし、

○「らく」
△同じことの格なれど、「おいらく」ハ、老と云ことにて、「たぐらく」と云ふことの
そハまがるなあり、おいのバハ連用言なればり弁言ふも云ひなれる格なり、
又こふらくハ、その「おいらく」の例なればへ「こひらく」と有べきに、ふのじ

ハ截断言なるを文てこゝぷらくと云へり、さて又らくハ又かもりて、又ハ連用云なれバおいぷらくの例ともきこゆるやうなれど、さハ。乃延たりたるともいはるべし、まさしくるをのべてらくといつるならんとおもふ。るくハ方十、天川ゑとよのあけぬらくと云つるなどゝ、かくまバ老ハおゆるゝと云へ、おいるとハさゝにいたゞんバ、たいうくをおいるの延ハまゝるとハきハめて云ふべうしざる、それとハかはつゝん。

ゆり、さて又おいらくのこぷらくめとのろてふをけゝてうけられバ、此らくハ用の語ユハゆらゝじゝるも思はる、但しこれユ分ノ山口栞をつくさがめて、考らくハりしおゆらくちるを、万葉をあやまりよゝそおぷらくと云へるゞハびこりて、古今などユハおいらくさかぬらくなどゝこゝろくく日例なるをゆゝと云へるハ、あれどみをひがゝなの悉らくさぬらくりゝきけど直ゆ今一きばゝくハしき兵端をせんすゞハ、さゝうてゝいまゞこえ服しゆへぬゝ、あなる心のおそきうゝ、又思ふに、らくハ用てらゝの活き、連用云なるかゝに、らくゝといへるハ例の躰云のさゆユ云ひ

なせるゆゑ、のゝも受るにやゆらん、質未なゞげるる論なれど、山口栞ト雀が
るこれゞ一條を考て、猶よく正を人もがゝとぞ祈ぐふかし、

○まく

△これハきゝの活きなるよゝ、土一巻四十五右のゝり分等ゆも云ひ、略図ユゆゝしてそれ受る辞をも示ゝつ、又七巻卅八ゝり分ゝ母詞のまゝくいふべきたるゝ、万十一、今ぐゆも見るゝりめそあむみぐて云ん年月久ゝけまくに、又同二十、あもうぐゝを玉にもがもやいゝぐおゝこゝづゝれ中にあへまかまくも、と有なゞハ、まくを連躰云ゝゝるに、截断言受るもゝてうけられを、なほくちくゝ辞ゝその校七巻卅八又て考べし、此ハ、又まく。此ハゝきなゞゝれ用云を弥のやうに云ひなんまく。とハ同じかゝぐゝ、けん。あへまゝむゝ云をのぐゝへゝるゝやゝまくハ此もなほらくのれゆ

ぐひこや、万十九廿足日木之山云云谷之越麻久こゝろ〳〵
ハゞ反年を麻久と云るならん、ぞ思ふなり、

○こゝ[illegible]云云[illegible][まく]のほ〳〵きゝ云[illegible]ゝ〳〵ぬけそかやう
にのりゞを所てをいつり。

△この解釈ハたゞつり、まくの[illegible]ハ、たゝんの[illegible]などゝ云へるゝ同例ゝて、
連用云を弁云ふ云ひなゝて、のゝ[illegible]ゝけゝるにを所れゝで文字のたゝ
ぬ故ゝそのゝこハ所らぞ、略図を按ゞ、諸活用云の連用のゝこゝろハ、何
ゝても、のゝと受らるゝおゝ〳〵ゝゝりての例格なるゝこゝを知べし、但しそれ
ごこれゝれの例証などハ、活語指南を披きて明らむべし、

○元長集 星よきてまゞもなう恋んほゝとぎゝ寄ゝ所ゝ紀るもつゝへ[ま]むかし

△此奇左の註ふこれハ云りゝハくゝの誤りこハ所〳〵ざるこゝやゝと云へるゝげ

ふいたれゝるやうなれゞ、さてもなほゝちよゝくハきこえ難きゝこ
とおもゝを、いたんやゝゝさへまゝたかゝ」ゝと[illegible]を添ゝりぃと名づゝし」、ゝ
初めにいへるかゝハいゝゞ云らんがゝゝぞおもハるゝ抑この家よかの正保四
年の鏤板の歌仙家集ゝこハ然ゝ云云たれゞゝこハ彼校本ゝて考ふれゞ、
「星よゞさゞ」の句ハ「ゝ寄をゞ」まゝ「つゝへまゝたかし」ハ「かゝらたまゝ所」
の誤りなりゝりゝと考ゝをたりゝさて色一首の趣よゝ通るふ所〳〵ゞ
やゝされバ「何まゝ所」ハ、りゝ「何まゝ所」の省云ゝそその例多ゝれゞ、
それを又「何まゝへ所」とゝをそへ云へるゝこハりゝかきこゝく決め
ぞ云べゝらんかし、

○[きゝ]古 [illegible]あきゝ[きく]ふあきね云云又云云「[illegible]きゝ」云云などの

□□きゝ□□きさハ。云云

△因ふ川出ん、古事記傳十九十八云、伎まゝ久を古言ふ祁久也云る許と多し　左今集に五の中のうりくゝ□おさあゝ云るなどハ字伎にて伎を祁久と云るも万葉などに例おゝし、くいへるハ少し、いうぐなり、実ふかゝ云へた、まゝ久なれど、なふぞハよきゝ□かろうやのみぐまてふまどあゝきゝ□もなし」など云へるもいとやもゝ、えらるれど、さてハきゝ□と云ふハ如斯こゝ定らぬなり、山口栞下巻十六コ云へるこゝ、ふり、合せ考ふべし、抑こゝに引る四首に、きゝ□と云ゝ五つ、えたる中に、古十九の、あゝきゝ□」後三の、をしきゝ□」大和物語の、なゞきゝ□」ハ、なゞ。をゝく。あゝく。」なりゝだすいへバ、をゝ、をもちきゝ、古十九の、よきゝ□ハ、なふぞハ□の弦なめれど

よゝ、なりゝ、稀けバそれもよく通るなり、又古十八の、うきゝ□」ハ殊に、うゝ。ふ。」なりゝ、ふ」と文れど云て有べきなり、然ハ、ふれど此類多く、□きゝ□」のゞきゝ□をバ、のゞき。」ゝ、ゝづく。」ハ、つても云ひがゝきなど亦思ふべきゝなり、如此をバ、きゝ」と標したる処ふ出せるなれバ、そ、たゞひゝつコのゝおゝコハ着をゝまゞきなり、凡て書よむコハかゝる心使まゝ久を祁久也」とハいへれど、き□をきゝ又く用ゐるゝなりたゞし、と云ゝハ云ハぬなり、云て有べきゝ狩考ふべし、

○かゝ□ハ切まゝる辞の下に添るゝとむゝ。云云

△げふ志のなれど今少し初学のためにゝなゝバ、かゝ□ハ截ゝ辞の下に添るゝとゝだゝ、さるハゝゝゝゝゝ詞どもきゝる処ゝるも、又てふをゝの截ゝこゝゝの下にも、又希求の辞の下にも、添るこゝゝ

なり」といたゞよろ〳〵からん、爰に引る奇どもにていまく〳〵つせ
ゑん。「かし」・「そよそもけな」「かし」・なゞハ、活く詞どものきる〳〵処ホそへ
たるなり、「かだろうぞ」「かし」・なゞハてホをゝの截るくにそへるる
り、「さそをゑよ」「かし」・「人のゝへ」「かし」・なゞハ希求の詞ホ係るなり、
「ゑこ」「かし」も同例なり、

○「へ」「かし」を「ヱ」かくのお〳〵下へ「を」を係へてをいつり。ヱ

△「ヤ」を係るハ、頼ホ意の詞の下なる「かし」に係へるぞ多き、され
どまれ〳〵ハ希求の云につけ〳〵る「かし」の外ホ、呉いもゆる截断云に
つけ〳〵る「かし」のそ下に「を」といつるもあり、大殘序に「れの」れを
故大政のれ〳〵ぐ貞伝公の「ヱ」めし」ハ其御時〳〵「かし」なのようきと

ぞいひ侍り〳〵「かし」「を」と〳〵〳〵るなゞを考ふべし、右ホ係たる
「へ」「かし」「を」いくよとゝ〳〵じ爰のオを「ヱ」「へ」「かし」「を」かゝ〳〵しくあ
のよろを「ヱ」ホ「ヱ」などのかし「を」も、「ヤ」「ヱ」〳〵ぞいひ侍りしかし「ヱ」
も、それ〳〵かゝりハなれど、その「かし」「を」の上なる詞の希求云なる
ハ、「ね」めづ〳〵しかし〳〵ぬ」あ〳〵なるを、右大殘序の如くに截断言をゝ
てかし「を」〳〵云へるハ、なホ〳〵なく〳〵ゑづ〳〵かホ生ゆるにゆ〳〵しゞや、ゆ〳〵しの
ハ連新言なれど止なるぞに川れて截断云〳〵持もるゝ三物の係分れかし、斯て考ホ二補
集ちゝ其源き公法紀考かりつそもおホつゝ〳〵ぞ〳〵れぬかし」ハ〳〵〳〵ゞ字語改あるべし

㊀かし「ハ」をゞて諸活用言の截断言一切ホつ〳〵なり、略図をこゝ結
曉〳〵せよ、「あり」き「かし」〳〵云ふべきを、「あり」。「かし」
近き世の人〳〵ハまく〳〵ゑゆ、

誠やゝおかえて元補集を更に披ぶ、その校合ハ件の「年
次き」の示、くさ次き谷の朝雄うけうてむおほつゝちくゝちれ
ぬゝし」ゝゝえゝゝう、初三四五の四句者かゝれり、さてその詞かき、
「左大将のひえへのありてかへうけうむうへコアうけそれちゝ
くはゝゝさうしゝふおぼつゝちなきまゝゝ乃寄れ返しす「小」と者、
傍に記せるハこれもかの猪苗代本の校合なり、かかくに「初」
つゝちくぞゝゝれぬかゝ」ゝとて示をけたゞべる者のゝうゝに
てハなきなり、詞書より一首のをべてをよく考ふべし、右異校
明ありゝハいまゞえさゝゝねど、印本コのまゝうて「ぞ」といへまを下めぬゝ
ここなりとさゞめのえをきまゞきをのゝハちりぬよき人なを考へてよ、

玉緒繰分乎巻